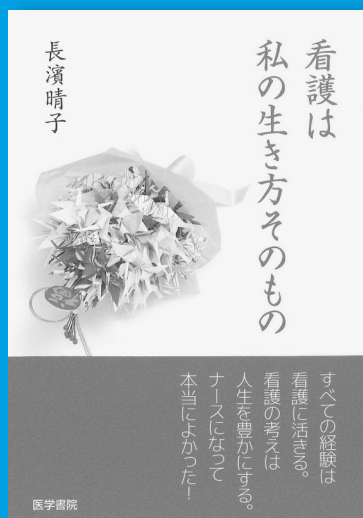


書評

看護は
私の生き方そのもの

- 著：長濱晴子
- B6判／248頁
- 定価：本体 1800 円＋税
- 医学書院

評者

茨城キリスト教大学看護学部 教授
小松美穂子

病の中から生まれた、
人生と看護へのメッセージ20 年間を振り返り、
看護の意味を考える

著者である長濱晴子氏は今年も 5 月末から 5 か月間の予定で中国内モンゴル自治区に滞在している。夫である長濱直志氏の、当地での沙漠化防治活動を支えて今年で 15 年目となる。

著者は看護大学卒業後、米国で 2 年間交換看護婦として勤務、帰国後臨床経験を積み、旧厚生省看護課を経て、国会議員秘書として立法に関わった経験を持つ。1993 年、突然重症筋無力症を発症、それからの 20 年を振り返り、まとめられたのが本書である。

現在、いきいきと活動する夫妻からは想像できない、20 年間に歩んだ道の厳しさとそれを乗り越えた意志と行動力に深い感銘を受ける。また看護は保健医療の場だけでなくあらゆる場での生活、活動の指針となることを著者は体験から説明しており、看護の奥の深さを教えられる。

考え抜いて病と向き合う

本書の内容は大きく 3 つに大別できる。

1 つ目は著者の病への向き合い方と実際である。その基本は「自分の人生は自分で決めるという強い意志と決断」にある。自宅療養の選択、セルフナーシングのさまざまな取り組み、近代医療の導入等にその姿勢と行動する勇気を見ることができ。患者中心の医療とは何か、そのために医療者に求められるものは何かを考える重要なメッセージが詰まっている。著者の「目と手を使って心で見る」看護者の育成は、看護基礎教育者の大きな課題と受け止めている。

沙漠化防治と看護の共通点は
「癒すこと」

2 つ目は病の中で見つけた新しい使命とそのための実践活動である。その使命は夫である直志氏のライフワーク、沙漠化防治活動への応援と参加である。恩師である故・高橋シュン氏の言葉「沙漠化防治は地球を癒すこと、看護は人を癒すこと。どちらも同じ」に励まされ、著者は難病診断から 6 年後初めて現地を訪れる。それから 10 年間、看護の視点を主軸にした活動が展開する。本書では、日中環境教育実践普及センター設立とそこでの活動事例について看護の視点から説明されている。問題解決志向による分析は示唆に富み、あらためて看護がさまざまな状況に応用できることが分かる。

看護がナースの生き方
そのものになるとき

3 つ目は著者が期待するナース、看護についての提言である。20 年の歩みの全てに一貫している著者の思いは「患者より 1 歩先を歩けるナース」である。その原点は自らの患者体験にある¹⁾。大切なのは、「一歩先を歩くこと」は看護だけでなく中国での活動、家族関係等にも共通であり、相手のことを一心に思い行動できる資質が求められるということである。

著者は、看護のアートとは「看護を日常生活に活かすこと、それが生き方そのものになったときである」という。「ナースでよかった」という著者の思いはこの言葉につながる。

看護に関わっている方々にぜひ一読をお薦めしたい本である。

引用・参考文献

- 1) 長濱晴子：患者になってみえる看護―難病が教えてくれたこと、医学書院、1996。